

2017年9月20日

## 西南学院大学文学研究科博士学位申請論文審査報告書

主査 C・S・ピュー

副査 酒井 三千穂

副査 宮本 敬子

学位申請者 銅堂 恵美子

論文題目 「William Faulkner と Toni Morrison における所有、人種、ジェンダー —  
*Go Down, Moses* と *Beloved*, *The Sound and the Fury* と *Paradise* 考察」

### 審査の経過

銅堂恵美子氏の学位請求論文は2017年4月5日に受理された後、3名の審査委員による予備審査を経て、2017年8月9日に最終試験（公開）を実施した。最終試験では、審査委員3名、教員5名、大学院生3名が出席し、銅堂氏による論文の概要説明の後、日本語と英語による口述試問が行われた。

### 論文概要

銅堂恵美子氏の博士論文「William Faulkner と Toni Morrison における所有、人種、ジェンダー—*Go Down, Moses* と *Beloved*, *The Sound and the Fury* と *Paradise* 考察」は、アメリカ建国の歴史や、アメリカ社会・文化の生成、発展において重要な役割を果たしてきた「所有」(property)という概念が、同じく歴史的・社会的に構築された「人種」や「ジェンダー」の問題と複雑に交錯しながら、個人や社会にいかに関与を与えてきたかを、20世紀の主要な二人のアメリカ作家、ウィリアム・フォークナーとトニ・モリスンの作品の比較研究をとおして明らかにしようとするものである。

序論ではまず、本論文のテーマについての先行研究の概要、および批評的・理論的な枠組みが述べられている。さらに、ホワイトネス理論、批判的人種理論、法哲学、ジェンダー研究を援用しつつ、本論文における3つの中心概念「所有」「人種」「ジェンダー」が、アメリカの歴史と文化のなかで位置付けられ、基本的定義が確認されている。「所有」とは、植民をする白人が、ネイティブ・アメリカンの暮らす土地を占有し、アフリカの黒人奴隷の労働力や人間性、個性を剥奪するために利用した法的な概念であることが考察される。また「人種」概念は、「白人の血の純潔」という観念に基づいた非対称的な社会的構築物で

あることが示され、この人種差別的な概念が、奴隷の人間性の抹殺と抑圧とを正当化するために利用されてきたことが明らかにされる。「ジェンダー」の問題は「所有」と「人種」の概念を関連づけるときに非常に重要になると論じられる。占有された土地と人々を所有し相続していくには、「純血の白人女性」という文化的神話が必要になるからである。それゆえ、結婚、生殖、家族は、フォークナーとモリスンの小説において中心的な主題となってくる。このあとに続く章では、このような予備的な主張を明らかにし発展させていくための、個別の作品研究が展開されていく。

第1章では、フォークナーの小説 *Go Down, Moses* における“The Bear”が取り上げられ、白人がネイティブ・アメリカンから土地を略奪し私有化していった発端と、土地の継承と共に「呪い」も子孫に継承されていった有様とが詳細に論じられる。主要な登場人物の白人男性 Isaac は、マッキヤスリン農園という遺産を「拒絶」し、土地の所有権を放棄することによって「呪い」の影響に抵抗しようとする。Isaac のそのような「抵抗」の試みの複雑さとアイロニーが、本論文の分析における焦点となっている。

第2章では、*Go Down, Moses* の “Was” と “Delta Autumn” を対象に、hunting (狩り) の儀式化が、ネイティブ・アメリカンの土地と黒人の「所有」における道徳的、文化的な矛盾を明らかにするためにフォークナーが利用した中心的な修辞 (trope) であるという主張が論じられる。

第3章では、分析の対象は「所有」と「人種」との関係に移り、モリスンの *Beloved* においてこれらの概念がどのように定義されているかが、法という観点から考察される。所有者により「財産」と法的に定義される黒人個人の、自分の人間性を貶められることに抵抗し、自己を「所有」し、本来の自己存在を取り戻すための苦痛に満ちた闘いが強調されている。

第4章では、フォークナーとモリスンの作品—*Go Down Moses* と *Beloved*—の比較・対照のため、両作品における「所有」と「自由」という概念の結びつきが比較検証されている。「所有」「人種」「ジェンダー」の概念がいかに白人支配を支えているかが示され、そのような抑圧への抵抗は不可避であるが、それには限界があり、時おり自己破壊的になることが述べられている。また、フォークナー作品における「個人的自由」と、モリスン作品における「共同体的自由」という中心的な差異が提示され、考察されている。

第5章では、アメリカ南部文化についての古典的研究書 W. J. Cash の *The Mind of the South*, ジェンダー批評、そして銅堂氏自身のこれまでの研究を利用し、「財産」と「血」が重要な意味を持っているため、アメリカ南部文化における白人女性は奇妙で重要な社会的地位を占めているという主張がなされている。本章では、フォークナーの小説 *The Sound and the Fury* を通して、女性に対するこの盲目的崇拜 idolatry (Cash の言葉では “gyneolatry” だが) のグロテスクで破壊的な影響力について、様々な方法で検討されている。

第6章は、モリスンの小説 *Paradise* における黒人共同体に注目し、「所有」によって特定の「人種」が特権化されるために、「ジェンダー」概念をとおしていかにかに女性のセクシュア

リティが管理・抑圧されるかを明らかにしている。とりわけ、土地、人種、ジェンダーという伝統的文化的概念に抵抗して、自らを再定義、再創造しようとする女性たちについて考察されている。

第7章は、*The Sound and the Fury*と*Paradise*に反映されている「所有」「人種」「ジェンダー」の関係性という問題に取り組む際に、女性たちの「拘束」と「移動」というモチーフがどれほど有益かを探求するものである。「空間」と「移動」についてのフェミニズム理論を援用し、登場人物たちの真に自由な人生を送ろうとする試みに、2つのモチーフの対立が深く関わっていることが示される。本章は、論文全体を通じて分析されている抑圧的な社会構築物に対する抵抗の可能性と限界を考察するものとなっている。

結論では、銅堂氏の研究の焦点である「所有」「人種」「ジェンダー」という3つの中心的概念の重要性が簡潔に繰り返されている。さらに、社会的構築物である抑圧的な複合体へのとぎれることのない抵抗についての作品中の描写が強調される。終わりにあたって、この論文で発展させられた批評手段を用いて、フォークナーとモリスンだけでなく、他のアメリカ文学作品の有益な分析も可能であろうと主張されている。

#### ・論文の評価

近代社会において「所有」は「自己」アイデンティティや「自由」と密接に関わる概念となったが、ジョン・ロックの哲学（所有論）が17世紀植民地政策に多大な影響をおよぼし、アメリカ合衆国における所有概念の礎となったことは周知のことである。本論文の優れた点は、フォークナーおよびモリスン研究においてこれまで多くなされてきた人種・ジェンダー批評に、この「所有」という観点を導入することによって、両作家の作品がアメリカ社会・文化の構造や成り立ち、あるいはその問題点をいかに鋭く描いているかを明らかにしていることであろう。

当然ながら、この論文には長所とともにいくつかの改善の余地も見られる。まず、論文全体の中心となる3つの概念（「所有」、「人種」、「ジェンダー」）はその定義をもっと明らかにしておく必要があるだろう。また、それらの概念の相互の結びつきは簡潔にまとめられてはいるが、そこから派生してくる「自由」や「血」という概念との結びつきについての議論が全体的に十分に展開されているとは言いがたい。さらに、文化的に構築されたこれらの複雑な概念における歴史的な変化、特に奴隷制度廃止後や第二次大戦後の公民権運動や女性解放運動の後の大きな歴史的変化については、もっと考察の必要があるだろう。分析対象となる作品の具体例の解釈についても時折、恣意的で説得力に欠ける箇所が見られる。

しかしながら、本論文に一貫して流れる主張は、「所有」、「人種」、「ジェンダー」からなる社会構造は絶えず抵抗を受けているということであり、この主張が各作品の独創的で興味深い事例研究において具体的に検討されているところは大きいと評価できる。銅堂氏の今

後の研究については、本論文で展開した批評方法を用いて、他のアメリカ文学作品の有益な分析も可能であろうと論文の結論部で述べられているが、この主張はまったくその通りだと思われる。なぜなら、本論文では、非常に多くの批評概念と比較・対照に基づく複数作品の読み方が示されており、それらが銅堂氏の今後の研究の強い枠組みとなることが期待されるからである。全体的に見ると、本論文はアメリカ文学研究の分野において、洞察に満ちた興味深い貢献をするものと言える。論文審査委員3名全員は、この論文は革新的な課題を定義し探求する銅堂氏の研究者としての資質を十分に示していると判断した。文学理論や批評および他の分野における最新の学問的成果を利用した研究方法は、専門家の域に達している。また、批評方法や先行研究が十分に意識されており、それらについての知識が論文中の各作品研究に応用されている。さらに、研究結果を論理的に、かつ説得力をもって表現する銅堂氏の能力は、明晰で広範囲な分野を扱った本論文において示されている。この能力は、公開論文審査会における口頭発表と審査委員からの質問に対する銅堂氏の回答からも、証明されている。

以上のことから、論文審査委員会は、銅堂氏の博士論文は、博士の学位を受けるにふさわしい基準を満たす優れた論文であると結論づける。